否定と呼応する副詞と程度副詞についての覚書

増井典夫

一、はじめに

日本語文法研究の中でも、副詞の研究はまだまだ進んでいるとは言いがたいようである。副詞というものの一般的な受け止め方は、「なんとなくわかっているようで、よく考えるとわからないもの」という所が正直な所ではないだろうか。

日本語教育等の現場では一般に、副詞を「情態、程度、陳述」の三種に分類する考え方に従っているようである。この考え方は、山田孝雄の説に根拠を置くものであるが、現在でも副詞研究の基本的な枠組みともなっており、本論文でも、この三分類に従って考察を行う。

「情態副詞」は「動作、作用、または事態のあり方を表して、主として動詞を修飾する副詞」と概説書などでは定義されるもので、用例としては「ついに、おのずと、すぐ（に）、はっと、ゆっくり（と）」などが挙げられるのが普通である。

「程度副詞」は「状態性の意味を持つ語にかかって、その程度を限定する副詞」というように定義されるもので、用例としては「やや、すこぶる、はなはだ、もっとも、ただ」などが挙げられるのが普通である。

「陳述副詞」は「否定、推量、仮定など、述語の陳述的な意味を補足強調するもの」というように定義されるものである。

もちろん現在の副詞研究においては、この三分類では片付かないとされているものもあるのだが、本論文ではとりあえずこの三分類に従い、まず最初に「陳述副詞」とされる内の、否定と呼応する用法の副詞とみられるものを対象として考察を進める。この語群の中には、程度副詞とみられる用法が目立つ「とても」、近年「とても」の程度副詞的用法と同様の用法が目立って来た「全然」も含まれるが、程度副詞とその周辺の問題の一部についても後段で少し考察を行いたい。

二、否定と呼応する副詞について

「否定と呼応する副詞」といわれるものを挙げてみると、

1 a けっして、さして、断じて　など（サ行動詞連用形＋テの形）

b たいして、絶えて　など（その他のテ）

2 そんなに、めったに、ろくに　など（ニのつく形。「ろくに」の類例には「ろくろく」などもあるが）

3 a すこしも、ちっとも　など（少量を表す副詞＋モ）

b 必ずしも、どうしても、どうにも、とても　など（その他のモ）

4 あまり、さっぱり、まるきり　など（リで終わる形。「からっきり」から変化して出来たと考えれば「からっきし」もこの類）

以上は語形に注目して並べてみたものだが、このほか、

5 いっこう、かいもく、さほど、さらさら、全然、そう、それほど、つゆ、てんで、とうてい、とんと、なんら、ほとんど、まったく、まんざら、もうとう、ゆめゆめ

などの語が挙げられる。そのほか、

6 まさか、よもや　など（否定推量を伴うもの）

などもある。

もっとも、これらの語がすべて否定と呼応する用法のみかというと、

・断じてこうだ
・どうしてもやりたい
・ほとんどその通り
・まったくそうだ

などはそうでもない。「あまり」「それほど」などは、

・あまり泣くから
・それほどやるとは

といった用法がある。他にも否定と呼応しない用法を持つものもあるだろう。

また、現在は主に否定と呼応する用法で使われているように見えるものでも、「けっして」や「たいして」などは歴史的にみると、

○「けっして」

・決して弟子の中に此曲者有るには極れり。搦捕て渡せよと（浮世草子・鬼一法眼虎の巻、四・三）

・歌で見りゃけっしてあなはあるとみへ（雑俳、末摘花・二）

・決して聟やむすめに、おひまはされて口をしい日を送るであらう（鳩翁道話、三・上）

〔ここでの「けっして」は「間違いなく、必ず、きっと」ぐらいの意味か〕

○「たいして」

・角力になりましてからは大して惣次郎も贔屓にして（真景累ケ淵〈三遊亭円朝〉、五八）

・総てｄｅｆｅｎｓｉｖｅ（受け太刀）とｏｆｆｅｎｓｉｖｅ（打太刀）とは。大して其便宜が違うもので。（内地雑居未来之夢〈坪内逍遥〉、九）

〔ここでの「たいして」は「大いに、はなはだしく」ぐらいの意味か〕

といった用例が挙げられる。「いっこう」の場合は、

①・一かう彼れをうち頼み、年月を送り給ふ（曽我物語、二―頼朝北条へいで給ふ事）

②・そなたはさていつかうじやくはいにましますがしゆしゆのげいをあそばすとみへた（虎清本狂言、望月の間）

③・江戸にてはいつかうといふことは、わるきことにのみそへていへど、京にてはよきことにもいつかうよい、いつかうゑらいといふ（羇旅漫録、中）

〔①の「いっこう」は「ひたすら」、②と③の「いっこう」は「たいそう」ぐらいの意味か〕

といった用例が挙げられる。「けっして」も「たいして」も「いっこう」も、否定と呼応する用法のみではなかったようである。また「めったに」も、

・わなわなふるひ手酌にて、めったに飲んでぞゐたりける（浄瑠璃・傾城反魂香、中）

・只ありがたやたふとやと、めったに銭をなげうちておがみける中に（談義本・華鳥百談、二・三―宝物を盗現罰を受し事）

〔ここでの「めったに」は「むやみやたらに」ぐらいの意味か〕

といった例が見られる。そのほか、

○「ろくに」

・三五郎守するならろくにしやと喚き（浄瑠璃・心中天の網島、中）

〔この例での「ろくに」は「完全に、十分に、まともに」ぐらい

の意味か」

○「必ずしも」

・カナラズシモ　ココロニワ　ベツノ　ハカリコトガ　アラウゾ（天草本伊曽保物語、驢馬と獅子の事）

〔ここでの「かならずしも」は「かならず」と同様の意か〕

○「まんざら」

・まんざら遊ぶもこけこけとして居るし（浮世風呂、四・中）

〔ここの「まんざら」は「ひたすら」ぐらいの意か〕

○「ゆめゆめ」

・努力努力（ゆめゆめ）急須（あからさま）に斬る応し（日本書紀・皇極四年六月、岩崎本平安中期訓）

〔ここでは「ゆめゆめ」は「つとめて、精を出して」ぐらいの意か〕

のようなものも、歴史的には「否定と呼応する用法のみの副詞ではなかったようである。

また、否定推量を伴うとされる「まさか」や「よもや」の場合も、

○「まさか」

・森羅万象かんで含るやうに出来てあれど、まさか覚えようといふ心のものが少い（談義本・古朽木、一）

〔ここでは「まさか」は「本当に」ぐらいの意か〕

○「よもや」

・いまだ若盛によもや後家立かね申へきと其方が身のために（浮世草子・本朝桜陰比事、二・九）

〔ここでは「よもや」は「きっと、多分、恐らく」ぐらいの意か〕

というように、元々否定と呼応する用法でのみ使われていたわけでもないようで、こうしてみると、過去から現在に至るまで「否定と呼応する用法のみ」で使われていた語をリスト・アップするという試みを行うのは意外に大変なように思われる。

一方、「とても」や「全然」は、以前は、

1、「とてもできない」

2、「全然よくない」

のように、否定と呼応する用法（ないしは「全然駄目だ」のようにマイナスの意味を持つ語を修飾する用法）のみが正しく、

3、「とてもいい」

4、「全然いい」

のような用法は誤用と一般には説明されて来た。しかし、3の「とても」の用法は昭和のある時期において許容されるものと認められたようである。一方、4のような用法は意見が分かれているようであるが（一般にはまだ認められていないとすべきか）、許容する人も増えてきていると思われる。（3や4の用法だと「とても」も「全然」も程度副詞の用法ということになろう。）

「とても」は元々、「とてもかくても」という語句の用法から生じた語と辞書では説明されているもので、その「とてもかくても」は、

・をのれはとてもかくても経なむ。女のかく若きほどにかくてあなむ、いといとほしき（大和物語、百四十八段）

・とてもかくても、いでむも行ひみん（蜻蛉日記、中・天祿二年）

などのように、否定と呼応という使い方ではない用例も多い。（ここでの「とてもかくても」は「どのようにしてでも」ぐらいの意か）。もちろん、

・身の甲斐なくてとてもかくても珍らしからぬ世なりや（宇津保物語、国譲下）

などのように使われていた例もあるわけだが、それが絶対ではなかった。同様に「とても」も、

・日本国に平家の庄園ならぬ所やある。とてものがれざらむ物ゆへに（平家物語、三・行隆之沙汰）

のような用例のほか、

・や殿矢田殿、我はとても手負たれば此にて打死せんずるぞ（太平記、大塔宮熊野落事）

のような例もあり、否定と呼応するというのが絶対ではなかった。「全然」も明治期には、

・利子と結髪の一條の如きは。全然破談なりと思ふてくれよ。（諷誡京わらんべ・二）

・僕は全然恋の奴隷であったから（牛肉と馬鈴薯）

・腹の中の屈托は全然飯と肉に集注してゐるらしかった。（それから・一五）

のように使われている例もあり、必ずしも「否定と呼応する用法のみ」というわけではなかった。[1]（ここでの「全然は「全く」というぐらい

の意味か。）

「とても」も「全然」もそれぞれ、「もともと否定と呼応する用法のみであったのが、誤用が元で否定と呼応しない形でも使われるようになっていった」というより、「もともと〈否定と呼応〉という条件などなしに使われ得るもの（程度副詞的）であったのが、何かのきっかけで〈否定と呼応〉と規定され、やがてそれが標準的な用法と考えられるようになっていった。しかし、また何かのきっかけで、その「標準的な用法」からはずれる、元々の用法に近い形の用法（「とてもいい」や「全然いい」など）が出て来たのだが、今度はそれらの用法は誤用とされた」とでもまとめるべきものではないか。（今後は、それぞれの用法の変化を及ぼしたきっかけの解明が検討課題となろう）。

現在は特に「全然」が問題にされることが多いようだが、これらの「誤用」の問題をみてみると、「人は、自分が持つ規範からはずれる用法を耳にしたとき、〈自分が知っているものより以前の用法がどういうものであったか〉などということは考えずに、自分の規範と違っていれば〈間違いだ〉といいたくなるものだ」などというようなことをいろいろと感じさせられるように思う。

三、「全然」の被修飾部分について

「全然」については、現代日本語において「全然いい」という用法が１００％認められていれば別だが、そうでない場合、被修飾部分の許容範囲というものをこれからの課題として検討していかねばならないだろう。例えば、

・「全然良くない」に対して
「全然いけない」
は同じように許容されるのか。（「全然行けない」と比べてどうか。）

というような問題である。これはまた、

・「おもいがけない」といった形容詞を修飾する場合に、
「全然おもいがけない」
というように使うことは許容されるのか。

といった問題にもなる。また、

・「とんでもない」「みっともない」といった形容詞の場合に、
「全然とんでもない」
「全然みっともない」
などというように使えるのか。

ということも問題になる。「とんでもない」「みっともない」は対になる肯定表現がないわけで、そういう場合は許容度は低いようにも思わ

れるのだが、実際にはどうなのか、これはどの程度許容されているか、調査してみる必要もあるだろう。

このような用法の問題について、今はまだ十分まとめきれていないが、今後さらに考察を重ねていきたい。

四、程度修飾に用いられる形容詞の副詞的用法について

現在では副詞を「働き」の面からとらえようとする立場からの研究が増えてきているようだが、しかし、副詞の働きはなかなか複雑で、簡単にまとめきることはできていない、というのが現状のようにも思まれる。筆者自身が勉強不足であり、さらに勉強しつつ、考察を積み重ねていきたいと思っている所である。

一方、日本語の文法研究は、品詞論を出発点として行われてきたが、品詞という「形」で定義しようとすると、副詞の場合は他の品詞や句から転成したものが多いが、どこまでを他品詞の副詞的用法とするか、どこからを副詞として認定するか、がどうしても議論の対象となる。形容動詞から来た「非常に、大変」などは副詞と説明されることが多いが、名詞から来た「一番、実際」、動詞から来た「さしあたり、くりかえし」などの場合、「名詞（動詞）の副詞的用法」と説明されることもある。

さて、形容詞の場合、例えば、

1、「美しく咲く」

などの「美しく」のようなものは、一般に「形容詞連用形の副詞的用法」と説明される。一方、程度修飾に用いられる形容詞である「えらい」や「すごい」などの場合も、

2、すごくきれいだ
3、えらく大きい

などの用法は、一般には「形容詞連用形の副詞的用法」の枠内のものとして説明されるが、

4、すごいきれい
5、えらい大きい

などの場合の「すごい」や「えらい」は副詞と説明されることが多い。しかし、「2や3と4や5は別品詞」と説明してそれで済ませてしまっていいものだろうかという疑問が残る。

副詞の働きを重視する立場からだと、4、5だけでなく2、3も副詞だと説明することもできるだろう。これらは形容詞というよりも程度副詞であると。

しかし、1の場合も副詞だと説明して広く理解が得られるとも思えない。となるとどこまでが「形容詞連用形の副詞的用法」で、どこからが副詞であるか線を引かねばならないのだが、その線引きは、なかなか簡単明瞭とはいかないのではないか。

「すごく」や「えらく」は程度副詞として形容詞と切り離して問題ない（形容詞としては特殊な性格のもの）とする考え方も成り立ちそうだが、同じく程度修飾に用いられる形容詞でもある「おそろしい」のような語の場合、

6、目がおそろしく光った。
7、目がおそろしく輝いた。

の「おそろしく」は「ぞっとするように」なのか、それとも単に「程度を強める」ぐらいの意味なのか。

私の内省では、どちらかというと6は「ぞっとする」、7は「程度修飾」の意味合いが強いように感じるが、これは個人差もあり、結局「文脈に頼るしかない」ということになるだろう。

筆者は、4、5のような場合の「すごい」や「えらい」を「形容詞終止連体形の副詞的用法」と記述した[2]。そのほうが形容詞という「形」、品詞の「形」を重視する立場からの説明として整合性があると考えたからであり、「形」の上からできるだけ簡単明瞭に説明をつけたいと考えたからである。問題の多い考え方かもしれないが、捨て難い考え方のようにも思う。

いずれにせよ、さらに考察を加えていかねばならないと考えている。

ところで「おそろしい」は明治大正期において次のような用法がよくみられた。

・「可恐い（おそろしい）光るのね、金剛石」（金色夜叉・前編、明30）
・「おそろしい疲れるもんですね。」（あらくれ、大4）

このように程度副詞的に用いられた「おそろしい」の用法だが、現在ではあまり使われない用法のように思う。「この用法が定着しなかったのは拍数（単語の長さ）と関係がある」と考えてみた。（「えらい」や「すごい」に比べて「おそろしい」の方が長い）（名古屋で用いられるデラが「どえらい」からの変化形だとすると、拍数を短くする力が働いた結果）。しかし、

・「おそろしい」では言わなくても「おっそろしい」と促音が入る形では使う（「おっそろしい疲れる」とは言う）

という指摘を受けた。なるほど「おっそろしい」では言いそうである。今後さらに検討が必要なようである。

五、流行語的に用いられる程度副詞について

前項で取り上げた「おそろしい」を含め、「えらい」や「すごい」などの語は「程度がはなはだしい」ことを強調する副詞的に用いられるものだが、このような、程度を強調する副詞は、少しでもより多く自分の気持を伝えようとするためか、過剰に用いがちで、その結果、効力がすぐ目減りするというようなことも起こる。そうなると、またより多く自分の気持を伝えられる言葉を探して新しく使いだすということも起こる。現在、よく耳にするのは、

・チョーいい
・チョーいかす

といった言い方だが、「すごい」などでは飽き足らなくなったために「チョー」といった語が新しく使われ始めたか。自分が使うのには「チョー」は抵抗があるが、この「抵抗がある」というのは自分の感覚が古くなりはじめたということなのかもしれない。

一方、「チョー」に比べて「全然いい」といった言い方を耳にすることが少なくなったような気もするが、もうすでに「全然」の価値の目減りということが起こっているのだろうか。（もう少し様子を見てみたいが）

他の語についても「使用価値の目減り」ということが起こっていないか、あるいは過去に起こったために使用が減ったという語はないか、今後もう少し考えてみたい。（「おそろしい」の場合などに使用価値の目減りなどということは起こらなかっただろうか）。

六、おわりに

否定と呼応するといわれる副詞、それに程度副詞の一部の用法について考えて来たが、今後の課題となるものばかりで考察の足りないところだらけである。しかし、あせらず少しずつ考えていき、自分なりの副詞像を打ち出したいと考えている。

注

（1）鈴木英夫「新漢語の受け入れについて――「全然」を例として――」（『国語研究　松村明先生喜寿記念』、平5　所収）などでも述べられている。

（2）拙稿「形容詞終止連体形の副詞的用法――「えらい」「おそろしい」を中心に――」（『国語学研究』27、昭62）参照。

参考文献

・渡辺実編『副用語の研究』（昭58、明治書院）
・『副詞の意味と用法　日本語教育指導参考書19』（平3、国立国語研究所）
・益岡隆志、田窪行則『基礎日本語文法－改訂版－』（平4、くろしお出版）
・森本順子『話し手の主観を表す副詞について』（平6、くろしお出版）